

# 大阪府教育委員会 令和4年度研究報告書

## 研究成果（概要）

大阪府の子どもに共通する課題である、読解力等の言語能力・情報活用能力の育成に向け、規模や取組みが異なる3市において研究を行い、効果・検証を進めた。それぞれの取組みの成果から、読解力などの言語能力等育成のためには、次の4点が重要であることがわかった。

- ・学校全体として、育成をめざす学力や授業像を取組みのねらいについて共通理解すること
- ・調査等を活用し、児童生徒の実態を精緻に見取り、把握すること
- ・汎用的な取組みとするためには、学習指導要領の指導事項に基づいた授業改善を推進すること
- ・「何のためにこの取組みをするのか」というねらいを教員だけでなく、児童生徒も意識し、共有すること。

## 1. 研究課題と調査・取組内容

### （1）具体的な研究課題

大阪府の子どもたちに共通する学力課題として、基礎的・基本的な言葉等の知識・理解や書かれたことを理解し、論理的に自分の考えを書くことなど言語能力の課題が上げられる。大阪府では、これらの課題解決として、平成29年度は学力やコミュニケーション力の基礎となる「ことばの力」を身に付けるため、小学校の低・中・高学年段階で言葉を使ってできるようになってほしい基礎的な内容を教材「ことばのちから～できるかなリスト～」としてまとめた。あわせて授業などで系統的に学習できるよう活用シートを作成し、府内の学校で活用を進めてきた。また、「スクール・エンパワーメント推進事業」を実施し、府内各市町村に学力向上の旗艦校を指定して当該学校及び市町村の学力課題克服の取組みを進めるとともに、府教材を積極的に活用し、言語能力を育成する授業改善を推進した。その成果として取組み実施校では、全国学力・学習状況調査の記述問題の正答率が向上するとともに、学習状況調査において、授業に関する子どもたちの意識の向上につながってきた。また、令和元年度からは同事業において「学校図書館を充実・活用するためのモデル小学校」を新たに指定し、学校図書館の機能を有効活用した授業改善の研究も進めている。モデル校では、子どもたちが図書資料を使って調べる力を計画的に育成し、調べたことから必要な情報を選び、まとめ、交流しながら深めていく言語活動を充実させる授業を行っている。令和2年度からは、さらに中学校にも拡充して取組みを進め、好事例をまとめ、広く普及しているところである。加えて、言語能力育成の基盤となる国語の授業づくりとともに、他教科等における言語活動を充実させ、学力向上につなげる「国語の授業づくりモデル小学校」を指定し、取組みを進めている。

また、令和3年度からは、子どもたち一人ひとりが学びの基盤となる読解力などの言語能力・情報活用能力等を向上させ、予測困難な社会を生き抜く力を着実につけることを目的とした大阪府独自のテストである「小学生すくすくウォッチ」の取組みを始めた。具体的には、5年生で国語・算数・理科に加えて、教科横断型の問題とアンケート、6年生で教科横断型の問題とアンケートを実施。国語では、文章に書かれている意味を正確に捉える力（リーディングスキル）をはかる問題を中心に実施。また、教科横断型の問題では、文章やグラフ等の様々な資料を題材に、問題をつかみ、資料を読み取り、思考して、自分の考えを表現する力を問うた。これらにより読解力等の言語能力の育成を府全体として図り、参考資料を配布するなどの取組

を進めてきた。

このような取組みを通じ、府全体として言語能力の育成に取り組もうとしているが、府内の市町村や各学校には、地域の特性や学校規模の違い、貧困などさまざまな生活背景のある子どもたちがおり、各地域において学力課題、生活の状況は様々である。より一人ひとりの課題・地域の状況に正対し焦点化された取組みが必要である。そのため、言語能力等資質・能力の育成にむけたさまざまなアプローチを行い、その成果を普及することで、各市町村が状況に応じた取組みを進めるよう考えた。

そこで、市町村の規模や取組みの違う3市を設定し、言語能力等資質・能力の育成のための取組みの効果検証を進め、普及・発信する。

- ・（茨木市）所管学校数の多い地域として、読解力の課題を明らかにするため、リーディングスキルテストを実施し、リーディングスキルを意識した授業改善について調査研究する。
- ・（摂津市）所管学校数が中程度の地域として、基礎的な読解力、情報を正しく読み取る力を身に付けるため、リーディングスキルテスト等から見取った課題を学習指導要領の指導事項と紐づけた授業改善を調査研究する。
- ・（枚方市）令和元年度より1人1台端末を導入し、ICT活用に先進的に取り組んでいる取組み実施校において、あらゆる学習場面において意図的・計画的なICT機器の活用により、言語能力や情報活用能力の育成について調査研究する。

## （2）研究課題に基づいて実施した調査・取組内容

### 《大阪府としての取組み》

各再委託市の取組みを指導助言し、広く普及発信するために以下の取組みを行った。

### ○大阪府学力向上推進協議会の開催

大阪府教育庁、再委託市教育委員会のメンバーによる、各再委託市の進捗状況の確認に加え、協議会アドバイザーの学識経験者による指導・助言を実施。7月に実施した第1回協議会においては、各再委託市の取組みの方向性や、取組みを進める際の留意点、各調査結果の活用方法などの確認、各学校へのよりよい指導助言の在り方などについて協議した。11月に実施した第2回協議会においては、各再委託市の取りまとめに向けての協議や、アドバイザーによる指導助言を行った。また、3市の事業実施校に訪問し、取組みの進捗確認や指導助言を行った。

### ○フォーラムの開催

令和5年2月に、「学力向上のための基盤づくり調査研究事業フォーラム」を開催した。再委託市教育委員会の2年間の取組み報告に加え、事業実施校の担当教員へのインタビュー、本事業アドバイザーによる2年間の成果のまとめを含む講演を行った。

開催形式をオンラインによる開催とし、当日のリアルタイム視聴による参加と後日に期間を設け、オンデマンド視聴による参加のハイブリッド開催とし、できる限り多くの教員が参加できるようにした。

### 《各再委託市教育委員会における取組み》

#### ＜茨木市の取組み概要＞

- ・読解力の課題を明らかにするため、リーディングスキルテストをモデル校で実施し、授業で確かな言語力を育成するために、リーディングスキルの観点を活用し、児童が主体的に取り組むことができる言語活動や学校の言語環境の充実を図った。

### ○取組み内容① リーディングスキルテストの活用（モデル校3校）

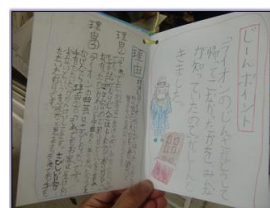
- ・リーディングスキルテストを毎年6月に5，6年生で実施。その結果から、全体の傾向をつかむとともに、一人ひとりの児童の状況を丁寧に把握し、顕著な課題が見られた場合は、必要に応じて個別の手立てを行い、支援した。
- ・教員が授業を通してリーディングスキルの視点を意識して児童を見取り、読み解く力の課題を具体的に把握するよう意識を高めた。その状況把握に基づき、各教科の学習において、課題の見られる観点の力を伸ばすことができる言語活動等を設定し、授業改善を図った。

#### リーディングスキルの6つの観点

係り受け	・・・	文の基本構造（主語・述語・目的語など）を把握する力（基礎）
照応解決	・・・	指示代名詞が指すものや省略された主語や目的語を把握する力
同義文判定	・・・	2文の意味が同一であるかどうかを正しく判定する力
推論	・・・	小学6年生までに学校で習う基本的知識と日常生活から得られる常識を動員して文の意味を理解する力
イメージ同定	・・・	図やグラフの示す内容を読み解き、言語化を図る能力。
具体例同定	・・・	言葉の定義を読んでそれと合致する具体例を認識する能力

### ○取組み内容② 本への興味関心を高め、言語活動の充実につなげた取組み（玉櫛小学校）

- ・興味がある本を読み、読んだ本の箇所にシールを貼っていく並行読書マトリクスを活用し、『じーンポイントとその理由』を交流したり、リーフレットにまとめたりする言語活動を行った。
- ・児童の「話したい」「聞きたい」という気持ちを喚起し、交流を通し深まった考えをリーフレットに表現することができていた。



### ○取組み内容③ 算数の図表について、自分の言葉で説明する取組み（山手台小学校）

- ・算数において、図表などを用いた説明を、ノートに考えを記載し、ペアでの交流やICTを活用して、全体交流を行った。
- ・単元を通して、図を自分で書く⇒説明するという活動を繰り返し、丁寧なフィードバックを行うことで、図について自分の考えを説明する文章を書く活動において、教員の手本や他の児童の良い文章、言葉づかいを取り入れ、徐々に論理立てて説明することができる児童が多く見られるようになった。



### ○取組み内容③ 総合的な学習の時間の学習と重ねて取り組んだ言語活動（東奈良小学校）

- ・6年国語『世界に目を向けて意見文を書こう』において、総合的な学習の時間で学習した『世界の12歳』から、「飢餓」「識字率」等のテーマについて考えてきたことも資料として活かし、意見文の構成を学習した。
- ・事実を読み取る⇒事実から自分の考えを持つ⇒論の組み立てを考える⇒文章を書くという段階を分けて丁寧に進めたことで、少しずつ主語・述語に気を付けて文を書いたり、意見文の構成を工夫したりする姿を見ることができた。また、小グループによる推敲や、友だちからの助言をもとに、自分では気がつかない修正点や工夫を発見することができ、より意欲的に取り組むことができていた。



## <摂津市の取組み概要>

- ・「学習指導要領に基づく授業改善」を行うため、子どもたちが「読みたい」「伝えたい」と意欲的・主体的に取り組むことを意識した「魅力ある言語活動」を取り入れた授業づくりに取り組んだ。並行読書（つながりに気づく読書活動）や目的意識をもった対話の相手を選定する交流を行うことで、子どもたちの読みの解釈を広げ、子ども一人ひとりの言語能力の向上を図った。

### ○取組み内容① 「魅力ある言語活動の充実」

- ・子どもたちの「読みたい」「書きたい」「伝えたい」などの意欲を引き出す手立てを工夫し、学習指導要領の指導事項の重点に迫る授業設計を考えてきた。子どもの意欲を引き出し、読み解く力を高めるため、子どもにとって学ぶ必然性のある場面設定かどうかを教員間でも確認しながら、授業づくりを進めた。
- ・特に言語活動の場面については、設定した言語活動に教員自身が取り組むことで、その内容を検討し、「指導事項に迫ることはできるか」「さらに必要な手立てはないか」を検討した。
- ・教員が事前に取り組み、討論の様子モデル映像など、子どもたちのモデルとなるものを作成し、子どもたちの支援に活用した。



討論会のモデル映像と、POPカードのモデル作品

### ○取組み内容② 「並行読書」の実施・並行読書マトリックス表の作成

- ・国語の授業などで、教員が学習している単元につながる複数の本を選ぶ。子どもたちは興味がある本を読み、読んだ本については、「並行読書マトリックス表」の該当箇所シールを貼付する。
- ・貼付の際、自身が気に入った本については、色の違うシールを貼り、自身の考えを表明するとともに、今後の言語活動の際に友だちの考えを知るきっかけとなるようにしている。



並行読書マトリックス表の例

### ○取組み内容③ 言語活動における目的意識をもった対話相手の選定

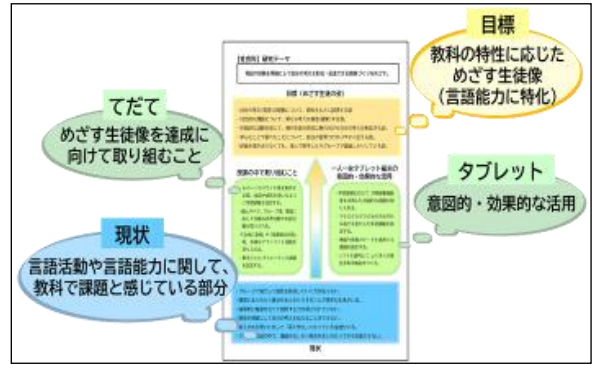
- ・前述の並行読書マトリックス表や、黒板に自分の現在の考えについて名前シールを貼るなどして、友だちの考えを知り、その上で、自身が話し合う相手を選ぶ活動を多く取り入れるようにした。
- ・教員に自動的に決められた相手とは違い、自身で対話の相手を選ぶことで、「誰と、どんな内容を話すか」目的を事前に明確に認識することができ、話し合う活動の充実につながった。

## <枚方市の取組み概要>

- ・教員の確かな授業力のもと、必要に応じたタブレット端末の活用を通して情報を収集することや、自分自身の考えをまとめること、まとめた内容を伝えるといった学習活動に取り組んだ。また、生徒自身が自身の行った言語活動や、自身の言語能力についてメタ認知し、自らの成長を自覚できるよう「言語能力のチェックリスト」を作成した。

## ○取組み内容例① 各教科における生徒の課題とめざすゴールについて、教科を越えて共有

- ・めざす生徒像と研究テーマ「タブレット端末を意図的・効果的に活用し、言語能力や情報活用能力を育む授業づくりをめざす」を踏まえた生徒の年度当初の課題について協議を行い分析した。
- ・全9教科及び支援学級の教科会等において、各教科ごとの研究テーマを策定し、全教科で「研究テーマシート」を作成した。
- ・教科を越えた教員間の授業参観や授業実践交流を実施した。



## ○取組み内容例② TPT (タブレット・プロジェクト・チーム) 会議の設定

- ・授業づくりについて協議する教科会と研究内容について協議する学力向上委員会が連携した TPT (タブレット・プロジェクト・チーム) 委員会を組織。
- ・「教科の壁」を越えて、ICT を効果的に活用した授業づくりについて協議する場を設定。
- ・TPT 委員会は、月1回、校長、教頭、ICT 活用部、各教科1名、支援学級担任1名で「四中 ICT 活用モデル」に基づく授業実践レポートの交流・協議を実施。

四中 ICT 活用モデル 授業実践レポート		実施日	7/31(日)	授業者	高橋
教科	数学	学年	1年	教科	活用ソフト (タブレット)
単元名	文字式	本時の目標 (めざす)		めざす生徒像 (言語能力に特化)	オクリンク
めざす生徒像	① 各教科で身につける資質・能力	めざすゴール		② 主体的に取り組む力	
時間	学習内容 (活動内容)	ICT活用場面		活用方法	
導入 [5分]	単元の導入、4枚の基盤紙を見るときに必要となるマツネットの構成を、どうやって手がたか、確認する。	★		資料に基づいて、オクリンク機材を確認する。何枚かの作品を撮影・発表する。	
展開1 [15分]	考えたいことを観察して、どのようにして考えを交流したのかを言葉で説明する。				
展開2 [20分]	展開1で取り上げたときに、必要なマツネットの構成を、他の方法【式】で表現できないかを考える。(自分で考え方を共有し合い、感じの考え方をまとめていく)	★		さまざまな方法で考えを整理する際に思考過程を整理する方法として ICT 機器を活用する。	
まとめ [10分]	展開2で考えた内容について、簡単に説明していく。	★		スライドの代わりとしてオクリンクを活用する。	

## ○取組み内容例③ 「言語能力の育成の指標【教員版】」「言語能力のチェックリスト【生徒版】」「言語活動カード」の作成・活用

- ・「言語能力を育成できたか」について客観的に判断するために、18項目からなる「言語能力の育成の指標【教員版】」(下左図)と17項目からなる「言語能力のチェックリスト【生徒版】」を作成

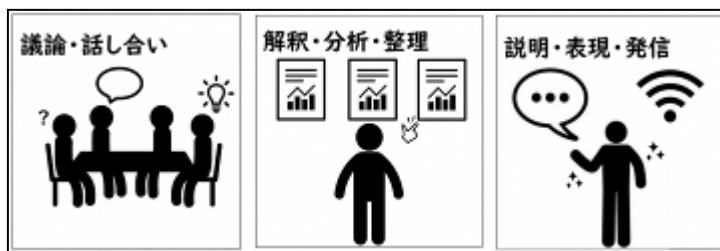
「言語能力の育成」の指標(指導の重点項目)【教員版】	
A 知識・技能	
A-1	言葉の働きや役割に関する理解
A-2	言葉の特徴やきまりに関する理解を使い分け
A-3	言葉の使いかたに関する理解を使い分け
A-4	言語文化に関する理解
A-5	既知知識(教科に関する知識、一般常識、社会的規範等)に関する理解
B 思考力・判断力・表現力等	
B-1	情報を多面的・多角的に調査し整理する力
B-2	言葉によって感じたり想像したりする力
B-3	感情や態度を言葉にする力
B-4	言葉を通じて伝え合う力
B-5	構成・表現形式を評価する力
B-6	考えを形成し深める力
C 学びに向かう力・人間性等	
C-1	社会や文化を創造しようとする態度
C-2	自分のものの見方や考え方を広げ深めようとする態度
C-3	集団としての考えを洗練・深化させようとする態度
C-4	心を豊かにしようとする態度
C-5	自己や他者を尊重しようとする態度
C-6	自分の感情をコントロールして学びに向かう態度
C-7	言語文化の創り手としての自覚

言語能力の育成の指標【教員版】

「言語能力」のチェックリスト【生徒版】	
説明・表現・発信	
<ul style="list-style-type: none"> <li>自分の考えを相手に根拠や理由を示して説明できた</li> <li>相手がわかりやすいように順序立てて説明できた</li> <li>テーマや問いを立てて説明できた</li> <li>目的や相手に合わせて言葉に説明できた</li> <li>目的や相手に合わせて書き方や話し方を使い分けられた</li> <li>図やグラフ、写真・動画など、資料や機器を使って相手にわかるように表現できた</li> <li>身につけた表現技法を使って表現できた</li> </ul>	
議論・話し合い	
<ul style="list-style-type: none"> <li>話を聞きたがら大事だと思うところをメモする事ができた</li> <li>相手の考えに賛同できた</li> <li>相手の考えに、反論・賛同・補足できた</li> <li>自分と相手の考えの同じところ、違うところを見つけた事ができた</li> <li>互いの考えの良い点を取り入れ、より良い案を考える事ができた</li> </ul>	
解釈・分析・整理	
<ul style="list-style-type: none"> <li>共通点に注目して情報を分類する事ができた</li> <li>目的に応じて文章(情報)や他者の意見を要約する事ができた</li> <li>テキストから、発言者が一番言いたいこと(主題・要旨)を捉える事ができた</li> <li>物事を様々な観点で比較する事ができた</li> <li>物事を事理的に捉える事ができた</li> </ul>	

言語能力のチェックリスト【生徒版】

- ・生徒が授業の中でどのような言語活動を行っているか自覚できるよう、「言語活動カード」を作成した。



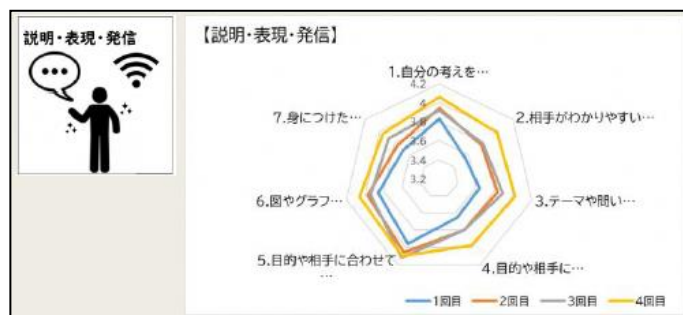
言語活動カード

- ・「言語能力の育成の指標【教員版】」は、教員の授業づくりにおいて重点項目の設定

の際に活用し、「言語能力のチェックリスト【生徒版】」は、生徒に意識させる言語能力として授業の際に「言語活動カード」とともに提示する。（各教室に用意）

#### ●取組み内容例④ 「言語能力セルフチェック」の実施

- ・言語活動・言語能力の育成に関し、生徒の「セルフチェック」として定期的にアンケート調査を実施した。生徒自身がセルフチェックすることで、自分自身が「できる」と感じている能力がわかることで、メタ認知を促し、成長の実感にもつなげることができた。また、教員はその結果を授業づくりに生かすことができた。（下図は結果の一部）



## 2. 効果検証内容・結果

<大阪府>

### (1) 効果検証のための指標

No.	検証のための指標	実施主体	具体的な検証内容
1	小学生すくすくウォッチの正答率	大阪府教育委員会	読解力を測るテストを行う 読解力等の活用の力について検証する

### (2) 指標に関するデータの取得方法（時期、回数等）

No.	検証のための指標	データ取得の時期、回数等
1	小学生すくすくウォッチの正答率	令和3年度5月に1回、令和4年度4月に1回

### (3) 検証の際に比較の対象とする学校等

取組実施校	比較対象校	比較対象とした理由
再委託市 事業実施小学校（4校）	大阪府平均	取組みを実施しているところとそれ以外を比較検証するため
計 4校		

【小学生すくすくウォッチの結果】

〔国語〕（読解力の基礎となる問題を中心に5年生にのみ出題。同一学年比較）

	令和3年度	令和4年度
大阪府全体	81.6	76.8
事業実施校4校	84.0	78.7

事業実施校平均では、大阪府平均を超えたものの、令和3年度と比べ、対府比はほぼ横ばい（1.03→1.02）  
→国語の基本的事項については定着している児童が多いものの、顕著な伸びは見られない

〔教科横断型問題〕（思考力・判断力・表現力を問う問題を中心に。5、6年で実施。同一集団比較）

	令和3年度	令和4年度
大阪府全体	55.1	69.0
事業実施校4校	58.8	68.7

事業実施校平均では、大阪府平均を下回った。特に図や表、グラフ、短い文章、会話文の内容を関連付けて、それをもとに論理的に考える問題に課題がある。

しかし、教科横断型の問題中の「興味のあることがらについて、意欲的に工夫して相手に伝える」内容の問題は府平均を上回っていた。

【フォーラムの実施状況】

- 参加者 453名（当日オンライン視聴及び後日オンデマンド視聴）
- 実施後アンケート結果・肯定的回答の割合
  - 「再委託市教育委員会取組み報告の内容について」…99.1%
  - 「フォーラムで学んだことを今後の授業改善に活かしたいと思いますか」…98.7%
  - 「フォーラムの内容を市町村や学校内の他の教職員等に広めたいと思いますか」…97.4%

＜茨木市＞

（1）効果検証のための指標

No.	検証のための指標	実施主体	具体的な検証内容
1	グローイングチェックの正答率	茨木市教育委員会	読み取りを重視した評価問題
2	アンケート調査の結果	茨木市教育委員会	読解力についての意識調査
3	全国学力・学習状況調査の国語『読むこと』の平均正答率	文部科学省	国語の読み取りを重視した問題

（2）指標に関するデータの取得方法（時期、回数等）

	検証のための指標	データ取得の時期、回数等
1	グローイングチェックの正答率	令和4年度各学期1回
2	アンケート調査の結果	令和4年度に各学期1回ずつ
3	全国学力・学習状況調査の国語『読むこと』の平均正答率	令和4年度4月

(3) 検証の際に比較の対象とする学校等

取組実施校	比較対象校	比較対象とした理由
茨木市立玉櫛小学校 茨木市立山手台小学校 茨木市立東奈良小学校	茨木市立茨木小学校 茨木市立畑田小学校 茨木市立西小学校	取組実施校と規模がほぼ同じで、取組みを実施している学校と実施していない学校を比較するため。
計 3校	計 3校	

【グローイングチェック国語正答率の結果】

(5年生)

		事業実施校	実施校以外	差
1	内容にふさわしくないものを選ぶ問題	34.5	35.7	-1.2
2	指示語の内容をとらえて、書く問題	76.1	70.7	5.4
3	表現の工夫を読み取り、効果を選ぶ問題	69.0	61.3	7.7
合計		59.8	55.9	3.9

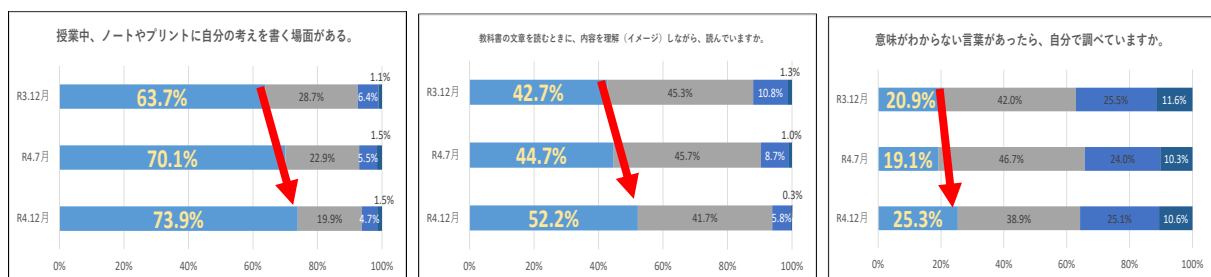
(6年生)

		事業実施校	実施校以外	差
1	主語を選ぶ問題	38.4	31.5	6.9
2	推薦文で薦めている相手を書く問題	72.2	72.0	0.2
3	推薦文を読み、薦める理由を書く問題①	36.1	24.5	11.6
4	推薦文を読み、薦める理由を書く問題②	47.9	47.1	0.8
合計		48.6	43.8	4.8

5年生では、「指示語の読み取り」「表現の工夫」に関する問題で、6年生では、すべての設問でモデル校がモデル校以外の正答率を上回った。特に6年生の「推薦文を読んで、薦める理由を書く」問題で顕著な差が見られた。

【読解力に関する児童アンケート調査の結果】

(事業実施校3校の平均・同一集団の経年変化：小5・12月→小6・7月→小6・12月)



- ・「授業中、ノートやプリントに自分の考えを書く場面がある」  
63.7% → 70.1% → 73.9%
- ・「教科書の文章を読むときに、内容を理解(イメージ)しながら、読んでいますか。」  
42.7% → 44.7% → 52.2%
- ・「意味がわからない言葉があったら、自分で調べていますか。」  
20.9% → 19.1% → 25.3%



【全国学力・学習状況調査の国語『読むこと』の平均正答率】

H31 年度：事業実施校 3 校すべてで全国平均を下回った。

※事業実施校平均：-4.1 ポイント

R3 年度：事業実施校 3 校すべてで全国平均を上回った。

※事業実施校平均：+4.6 ポイント

R4 年度：事業実施校 3 校中 2 校で全国平均を上回った。（2 校は R3 から向上傾向が見られた）

※事業実施校平均：+2.5 ポイント

< 摂津市 >

(1) 効果検証のための指標

No.	検証のための指標	実施主体	具体的な検証内容
1	東京書籍の標準学力調査の正答率	東京書籍	資質・能力のうち特に「知識・技能」及び「思考力・判断力・表現力」の状況を検証する。
2	児童へのアンケート調査の結果	摂津市教育委員会	資質・能力のうち特に「学びに向かう力、人間性等」の状況を検証する。
3	教員のアンケート調査の結果	摂津市教育委員会	資質・能力のうち特に「学びに向かう力、人間性等」の状況を検証する。

(2) 指標に関するデータの取得方法（時期、回数等）

No.	検証のための指標	データ取得の時期、回数等
1	東京書籍の標準学力調査の正答率	令和 3 年 1 2 月及び令和 4 年 1 2 月の 2 回、取組実施校及び比較対象校の児童に対して学力検査を実施する。
2	児童へのアンケート調査の結果	令和 3 年 7 月、1 2 月、令和 4 年 3 月及び令和 4 年 7 月、1 2 月の 5 回、取組実施校及び比較対象校の児童に対してアンケートを実施する。
3	教員へのアンケート調査の結果	令和 3 年 1 2 月、令和 4 年 1 2 月の 2 回、取組実施校及び比較対象校の教員に対してアンケートを実施する。

(3) 検証の際に比較の対象とする学校等

取組実施校	比較対象校	比較対象とした理由
摂津市立摂津小学校	同規模の摂津市立小学校	同一市内にあり学校規模や学力の状況が類似しているため。
計 1 校	計 1 校	

【標準学力調査の正答率】

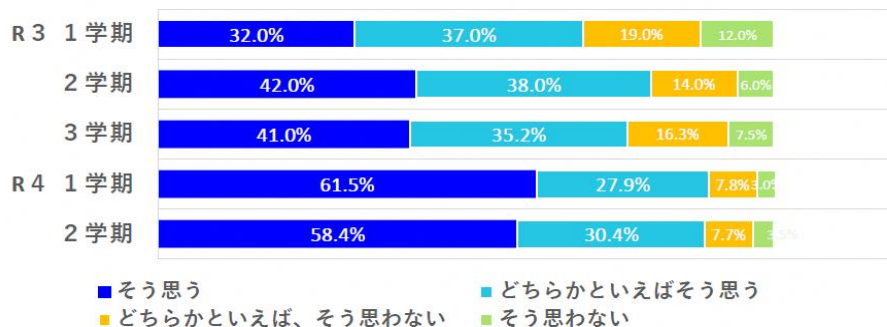
国語「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」の結果（6 年）

領域	「知識・技能」			「思考力・判断力・表現力」		
	学校	全国	全国比	学校	全国	全国比
事業実施校	66.9	64.4	1.04	62.9	56.8	1.11
比較対象校	65.3	64.4	1.01	62.7	56.8	1.10

【児童アンケートの結果】（事業実施校 1 年生～6 年生・令和 4 年度 1・2 学期）  
「国語の学習が楽しい」

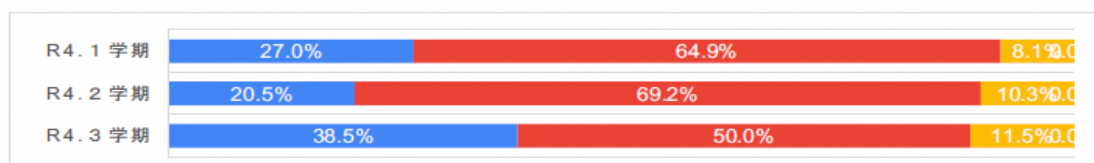


「授業中、自分の考えをほかの人に伝えることができている」



【教員アンケートの結果】（事業実施校令和 4 年度 1～3 学期）

「児童は、生き生きと進んで学習に取り組んでいる」



「『めあて』内容や提示の仕方を工夫し、児童がその授業で『何ができるようになるか』といったゴールイメージを明確にもてるようにしている」



<枚方市>

(1) 効果検証のための指標

No.	検証のための指標	実施主体	具体的な検証内容
1	中学生チャレンジテストの記述式回答の正答率	大阪府教育庁	資質・能力のうち特に「思考・判断・表現等」における記述式回答に対する生徒状況を検証する。
2	生徒・保護者へのアンケート調査の結果	枚方市教育委員会	資質・能力のうち特に「学びに向かう力、人間性等」の状況を検証する。
3	学校独自の生徒へのアンケート調査（1）	学校	授業における言語活動でのタブレットの活用の有効性について検証する。
4	学校独自の生徒へのアンケート調査（2）	学校	生徒自身の言語能力の状況及び成長度を検証する。

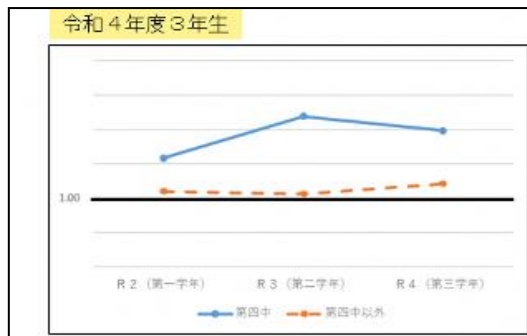
(2) 指標に関するデータの取得方法（時期、回数等）

	検証のための指標	データ取得の時期、回数等
1	中学生チャレンジテストの記述式回答の正答率	第三学年：令和4年9月 第二学年：令和5年1月 ※昨年度実施分と同一集団の経年比較を行う。
2	生徒・保護者へのアンケート調査の結果	令和3年9月・令和4年2月・令和4年5月・令和4年10月にそれぞれ、取組実施校及び比較対象校の生徒にアンケート調査を実施する。
3	生徒へのタブレット活用アンケート	令和4年7月・令和4年11月にそれぞれ全学年でアンケート調査を実施する。
4	生徒への言語能力確認アンケート調査	令和4年6月・令和4年9月・令和4年12月にそれぞれ全学年でアンケートを実施する。

(3) 検証の際に比較の対象とする学校等

取組実施校	比較対象校	比較対象とした理由
枚方市立第四中学校	第四中学校以外の市内中学校	全中学校にタブレット端末が導入されたが、第四中学校は先んじて導入していたため
計 1校	計 18校	

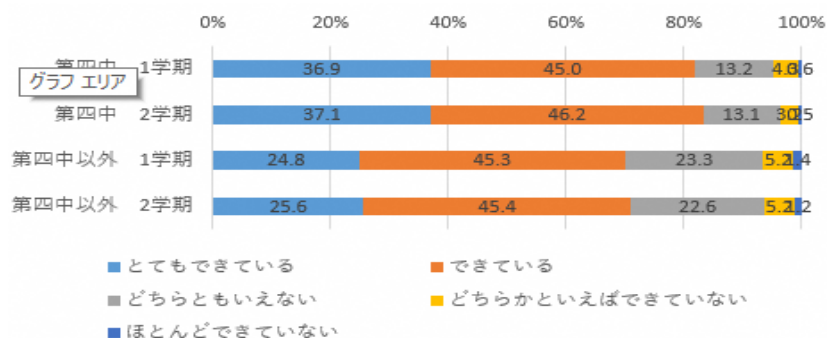
【中学生チャレンジテストの記述式解答の正答率】（同一集団3年間の結果）



年度・学年	実施校	実施校以外
令和2年度・1年	1.12	1.02
令和3年度・2年	1.24	1.01
令和4年度・3年	1.20	1.04

【生徒・保護者へのアンケート調査の結果】

生徒「iPadを使うことで、友達の考えや意見を聞いて自分の考えを深めることができますか」



保護者「自分の考えをまとめたり、iPadやノートに考えを表現しているか」肯定的回答

	令和3年度1学期	令和4年度1学期
事業実施校	67.8%	74.5%
事業実施校以外	68.8%	71.4%

【生徒への言語能力確認アンケート調査】（一部抜粋・5点満点で生徒がセルフチェック）

【説明・表現・発信】	1回目	2回目	3回目	4回目
・自分の考えを相手に根拠や理由を示して説明できる。	3.83	3.94	3.92	4.06
・相手がわかりやすいように順序立てて説明できる。	3.55	3.77	3.79	3.98
・図やグラフ、写真・動画など、資料や機器を使って相手にわかるように表現でき	3.86	3.97	3.94	4.06

【議論・話し合い】	1回目	2回目	3回目	4回目
・話を聞きながら大事だと思うところをメモすることができる。	3.72	3.85	3.9	3.99
・自分と相手の考えの同じところ、違うところを見つけることができる。	4	4.1	4.09	4.14
・互いの考えの良い点を取り入れ、より良い案を考えることができる。	3.88	3.99	4.02	4.05

【解釈・分析・整理】	1回目	2回目	3回目	4回目
・テキストから、発信者が一番言いたいこと（主張・要旨）を捉える事ができる。	3.7	3.81	3.86	3.93
・物事をさまざまな観点で比較することができる。	3.75	3.89	3.92	4.02
・物事を多面的に捉えることができる。	3.66	3.8	3.88	3.94

3. 考察（指標に関するデータの分析結果、本調査研究における取組の有効性等）

府域共通の課題として、子どもたち一人ひとりが学力の基盤となる読解力などの言語能力・情報活用能力等を向上させるため、3市で取り組んできた。

茨木市における研究では、リーディングスキルテストや多層指導モデルMIM教材のアセスメント結果を活用しながら、授業改善に取り組んできた。教室には理解度や定着度が様々な児童が在籍しているため、授業者がリーディングスキルテストやMIM教材から、児童の実態を丁寧に把握し、児童の状況に応じた単元計画を作成したうえで、児童がつまずきやすいポイントに焦点をあてて、手立てを構築していくことが重要となる。また、学習語彙や学習内容の理解を単元の学習にあたって揃える（レディネスを揃える）ことで、どの児童も学習課題や言語活動に対して、主体的に取り組もうとする姿勢が高まることが見られた。

研究初年度、茨木市が行ったリーディングスキルタイム（リーディングスキルの育成のために、プリント学習や話型の指導、語彙を増やす指導などが中心に行う指導）では、児童の言語への意識が高まり、指標に伸びが見られる一方で、児童一人ひとりの主体性や継続性を高めることには十分ではないことが明らかになった。そのため、言語への意識を高めつつ、児童が主体的に取り組む言語活動を中心とした授業改善の必要性を改めて認識した。

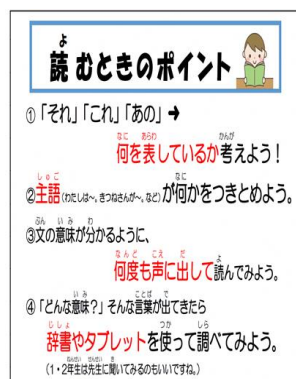


今年度、教員が前述のリーディングスキルの6観点を理解した上で、授業づくりに活かすイメージを共有したことや、プリントの形態を必要に応じて、児童が思考するものに変更したことが、児童の言語能力の向上につながったものと考えられる。

つけたい力を意識した言語活動を取り入れることで、児童の学習意欲の向上だけでなく、主体的に言語活動に取り組む姿が多く見られるようになった。授業時に意識を高めることができるよう、「話す・聞くポイント」だけでなく、「読むときのポイント」を新たに掲示し、読む前に児童と再確認を行うことを意識することで、なんとなく読むのではなく、感度を高めて読む意識が高まった。そのような活動を積み重ねることで、能動的に情報を読み取り、自分の考えを表現しようと粘り強く取り組む姿が多く見られるようになり、同時に言語力の高まりも徐々に見られるようになった。例えば、ノートに理由や考えの根拠を明確にしてまとめ、クラスメイトと見合ったり、伝え合ったりする学習活動を積み重ね、丁寧にフィードバックを返していくことで、定着の深まりが見られるようになった。

また、担当者だけでなく、学校全体でことばに慣れ親しむための参加型の校内環境の整備や工夫

(各階の廊下にQRコードを掲示したり、職員室の横や廊下に言葉遊びや言葉集めの取り組みを掲示したりする工夫)を行うことで、児童が楽しみながら学ぼうとする姿が多く見られた。



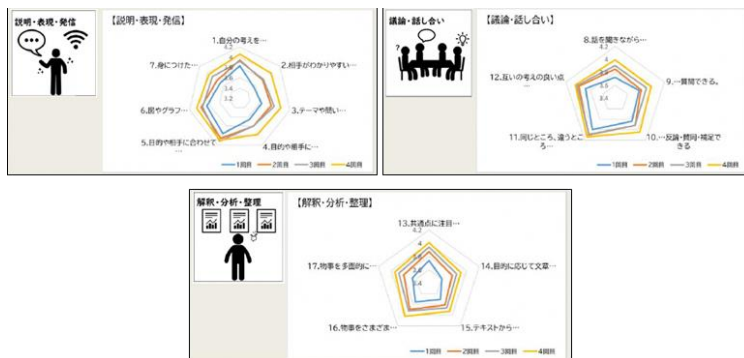
摂津市における研究では、「魅力ある言語活動」を取り入れた授業づくりにより普通の授業が大きく変わった。事業実施校である摂津小学校では、「魅力ある言語活動」とは、「学習指導要領の指導事項の重点に迫る設計であること」「子どもにとって学ぶ必然性のある場面設定であること」「子どもたちが、『読みたい』『書きたい』『伝えたい』という意欲を引き出す手立てがあること」とし、授業改善に取り組んできた。教員は子どもたちが主体となる授業構成をより意識するようになり、子どもたちの言語活動のモデルとなる映像や作品を事前に作成するなどして、子どもたちが活動に取り組みやすくなるよう工夫した教材の開発に取り組んだ。また、読む力を育むために、並行読書を行ったが、その際、クラスの子どもの読んだ本をマトリックス表にまとめることで、授業で作品について対話する相手を目的に合わせて選ぶことができ、意欲的に言語活動を行うきっかけ作りとなった。学習意欲向上のために有効であったと考えられる。

また、全学年を対象とした児童アンケートでは「授業中、自分の考えをほかの人に伝えることができている」という項目で、肯定的回答が88.8%と取り組み前よりも20%近く向上していることから、これらの取り組みが有効であったと考えられる。調査対象としている学年の子どもの各種学力調査の結果からも読解力が向上している様子もみられた。特に「読むこと」においては、どの学力調査においても対全国比を上回る結果であった。並行読書の実施により読書量が増加し作者と作品、作品と作品などの「つながり」に気づく読み方が意識できる子どもが増えている。また、目的意識をもって対話する相手を選び交流することは、特に「話す力」「聞く力」といった言語能力の向上に有効であったと考えている。

枚方市の実践校、第四中学校では、学習場面において効果的にタブレット等を意図的・計画的に活用し、「必要な情報を収集する」「自分自身の考えをまとめる」「まとめた内容を全体に伝える」ことをすべての教科において継続的に進めた。これにより、生徒が自ら情報を取得し、自ら考えまとめ、受け手の状況などを踏まえた発信・伝達力を高めることにつながったと考える。

「言語能力のチェックリスト」のアンケート「iPad を使うことで、友達の考えや意見を聞いて自分の考えを深めることができているか」や「大阪府中学生チャレンジテスト」における記述式問題の正答率の割合が、大阪府及び当該校以外の市内 18 校をも上回る結果となっていることから有効であったと考えられる。

また、「言語能力の育成の指標」は教員に育むべき資質能力を、「言語能力のチェックリスト」や「言語活動カード」は言語活動の内容や自身の身に付けるべき言語能力を「見える化」することができ、教員や生徒自身に、より鮮明に意識付けできたと考える。また、「言語能力のチェックリスト」の結果を生徒と共有することは、生徒が自身の言語能力についてメタ認知をすることを促し、自身のこれからの学習への取り組み方について考えるきっかけとなったと考えられる。これらのリストやカードがあることで、授業づくりに関しても言語能力を意図的に授業の中に取り込む意識が教員に生まれ、授業改善が推進できたと考える。



以上の3市の成果が見られた取組みから、共通する点として考えられることは、「子どもたちに付けたい力が明確であり、学校全体として授業改善に取り組む方向性が確かであること」「様々な調査等から、子どもたちの実態を精緻に把握した上で、取組みを実施すること」「取組みの成果について共有し、更なる授業改善につなげること」である。

大阪府においては、各地域において学力課題の状況は様々であるが、以上の点に配慮しながら、各学校で子どもたち一人ひとりの状況に正対した取組みを進めることで学力向上の基盤となる読解力などの言語能力を付けることができると考える。また、広域を所管する大阪府としては、今回のフォーラムの参加者数の多さや、アンケート結果の肯定的な回答の多さからも、言語能力の育成のために授業改善が必要と考えている学校、教員のニーズに応じた、取組みの発信が必要と考える。今回のフォーラムのように、オンラインを活用し、時間や場所を柔軟に選んで情報が得られる場を提供することも好事例の普及・発信のためには有効であったと言える。

#### 4. 課題

2年間にわたり、再委託市の3市において様々な角度から読解力などの言語能力を育成する取組みを行ってきた。どの取組みにおいても一定の成果が見られた一方、成果が出るまでに取組みの目的や意味、方法を明確にし、教員全体で共通理解することは、決して容易ではないことが、課題として挙げられる。例えば、茨木市の取組みでは、リーディングスキルテストやMIMについて正しく理解し、分析結果を活用するためにどのような方法を取り入れるのかを、教員全体で共通理解し進めていくことが必要となるが、これは決して容易なことではなかった。また、3市のどの取組みにおいても、「子どもたちにどのような力をつけたいか」というゴールを明確にしながら、取組みの目的や意味を理解しながら進めることが必要不可欠であるが、一方で、その取組みが過多になっていないかという点も、考える必要がある。特に子どもの実態を把握する調査やアンケートについては、その実施や分析に教員や子どもたちの時間や労力を極力取らないよう配慮が必要であることから、いかに効果的・効率的に取り組んでいくかということも今後の課題として考えていく必要がある。

本事業で得られた成果や課題を踏まえ、どの学校でも取り組もうと思える汎用性や、取り組み続けられる持続性のある学力向上施策にいかしていきたい。

## 5. 今年度の研究経過

月	内 容
4月	・小学生すくすくウォッチ（小学校5・6年生）実施
5月	・文部科学省による連絡協議会
7月	・第1回学力向上推進協議会 今年度の計画、進捗確認及びアドバイザーによる指導・助言
9月	・中学生チャレンジテスト（3年生）実施
10月	・府による事業実施校訪問（茨木市立玉櫛小学校・枚方市立摂津小学校） 進捗確認及び学校・市教委への指導・助言
11月	・文部科学省による実地調査（茨木市立山手台小学校） ・府による事業実施校訪問（摂津市立摂津小学校） 進捗確認及び学校・市教委への指導・助言 ・第2回学力向上推進協議会 進捗確認、今後の計画確認及びアドバイザーによる指導助言
12月	・研究発表会（枚方市立第四中学校）
1月	・中学生チャレンジテスト（1・2年生）
2月	・研究発表会（摂津市立摂津小学校） ・文部科学省による報告会

## 6. 研究関係者

### (1) 学力向上推進協議会構成メンバー

所 属	氏 名
京都女子大学 発達教育学部 教育学科	教授 水戸部 修治
大阪府教育庁市町村教育室小中学校課 学力向上グループ	首席指導主事 宮本 洋介
	主任指導主事 田中 守
	指導主事 河内 誉夫
茨木市教育委員会 学校教育課	参事 大池 輝暢
	指導主事 田中 拓
摂津市教育委員会事務局 学校教育課	課長 河平 浩一
	指導主事 大槻 満
枚方市教育委員会事務局 学校教育室	課長 井手内 太吾
	係長 田中 大登